

空白の語るもの : 『アグネス・ 그레이』におけるジェンダーと語り

著者	新野 緑
雑誌名	神戸外大論叢
巻	52
号	2
ページ	15-40
発行年	2001-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001192/

空白の語るもの

—『アグネス・グレイ』におけるジェンダーと語り—

新 野 緑

1. 語りの空白

『アグネス・グレイ』(1847)は、主人公アグネスが、ガヴァネスとして赴任したブルームフィールド家とマレイ家で、子供の悪戯や親の無理解に悩まされながらも、高潔な牧師ウェストンの愛を得て幸福な家庭を築くまでを語る一人称小説である。上流の家庭で家族同様に生活して一家の内情をつぶさに観察しながら、あくまで他者としてその世界の外に身を置くガヴァネスは、一人称小説が必然的に含む主観の歪みを排し、語りの客観性を保証することで、支配階級の現状をリアリスティックに写し取り、その欠点を鋭く指摘する社会批判の視点を得る。

小説の冒頭、「本当の物語は、どんなものでも教訓を含んでいるものです」⁽¹⁾と語り始めるアグネスは、「真実らしさ」を物語の第一義とし、読者への「教訓」と称して大胆な現実描写を取り込んだ十八世紀小説の伝統を踏襲することで、自己の語りが社会の現実をありのままに写したリアリスティックな物語であることを読者に保証する。しかし、この記述に続く、

私は名もない者ですし、年月も経っており、何人かの名前は変えてありますので、思い切って、率直に、いちばん親しい友にも決して打ち明けないこととお話します。(1)

という言葉は、すべてを「率直に」語るという主張にもかかわらず、語り手の意識的、無意識的な操作が介入する可能性を示唆して、彼女が保証する物語の真実性に微妙なゆらぎを与えてもいる。物語は、語り手が自分の日記からの抜粋にコメントを加える形を取る。ここにもまた、日記というジャンル

が本来持つ隠し立てのない真実性と、それに対する語り手の操作という相対立する要素が読み取れる。しかも、アグネスが告白する「真実」が、「いちばん親しい友にも決して打ち明けたくない」心の秘密、つまり、ガヴァネスをめぐる社会的現実ではなく、ウェストンへの恋に揺れ動く彼女の心の真実を表すとされることは、一方で語りの客観性を強調する彼女の物語が、心理や感情などの主観に色濃く彩られている可能性を示唆するだろう。

じっさい、ウェストンへの思いを語るアグネスは、隠し立てをしないという先の主張にもかかわらず、しばしばすべてを語りきらずに言いよどみ、口ごもらずにはいない。ウェストンの妻になる夢を「なんて素敵なことでしょう、もしも——」と言いかけて中断したアグネスが、

この本を書きはじめた時には、すべてを包み隠さずお話しするつもりでした。(略)でも、天上の天使になら喜んで見せはしても、地上の兄弟には、たとえそれが彼らの中でもっとも善良で優しい人であっても、決して見せたくない思いもいくつかはあるものです。(110)

と弁解するのは、彼女の語りにひそむこうした矛盾を明らかにする。もちろん、女性が自分の恋心を赤裸に語るのがヴィクトリア朝の「礼節」に反する行為であることを思えば、アグネスの沈黙は、語り手の「上品さ」を守るためのポーズと言うこともできるだろう。たしかに、ここで彼女が言いよどんだ言葉を補うのは簡単で、語らないことがかえって雄弁にウェストンに対する思いを表してもいる。しかし、アグネスが同じようにウェストンへの思いを語る、

もっともと言葉を重ねて、心の深みに降りてゆき、ほかの思いを打ち明け、読み手が答えに窮する問いを投げかけ、それが理解されずに偏見を招いたり、ひょっとすると馬鹿にされかねないくらいまで言えるでしょうが、それは控えましょう。(139)

という一節では、語られずに放置された語りの空白は、ウェストンへの恋心といった明確な形をとらない彼女の意識下の思いを、読者には決して理解さ

れない謎，当時の社会規範を越えた不穏な何かとして漠然と暗示するにとどまっている。アグネスの語りには，語り手の「慎み」を示すだけではない意味の空白が，たしかに存在しているのである。

アグネスが言葉による意志伝達の限界を鋭く意識する沈黙の人であることは，すでに多くの批評家が論じている。⁽²⁾たとえば彼女は，父親が投機に失敗して借金を背負った時に，自分の楽天的な考えが家族に理解されず，むしろ非難の対象とされるのを恐れて，それを口に出すことをしない（5）。また，ガヴァネスとして赴任した二つの家庭では，雇い主の間接的なあてこすりによって，彼女は自己弁護の機会を奪われ，彼らの不当な扱いや評価を正すことができない。

あんなに甘やかされて道理のわからない人達と議論を始めても無駄ですから，私は口をつぐみました。こうして，私は耳障りな事が言われると黙り込むようになり，心に苦々しい思いを抱きながら，顔には穏やかな微笑みをまとうようになったのです。（145）

理解されないという思い，あるいは分かろうとしない周囲の態度，すなわちコミュニケーションの不能の意識が彼女を沈黙させる。そしてそのことによって，寡黙で穏やかな外観からは窺い知れない苦々しく激しい思いが彼女の心の中に鬱積してゆく。彼女の日記をもとにした小説『アグネス・グレイ』は，外からも内からも「沈黙」を強いられた主人公が，現実社会では口にせず，そのために心の中にわだかまった思いを正直に語る告白小説の形をとる。しかしすでに見たように，言い表せなかった思いを残らず書き綴るはずの彼女の語りが，さらなる空白を抱え込んでいることを思えば，その語りの背後にも語ろうとして語ることのできない，いまひとつの物語がひそんでいるといえるのではないか。

こうして，『アグネス・グレイ』は，ガヴァネスの過酷な現状を訴える社会的，道徳的言説の裏で，当時の社会で表立って表現することが憚られるヒロインの密かな恋心を語り，さらにその背後に，言葉では言い表すことがで

きず、他者に理解されることもなく、おそらくは語り手のアグネス自身も把握しきれない奥深い心の真実をひそませる、重層的な物語となる。主人公が現実の場では語らなかった「真実」を彼女の手記に読む読者は、さらに、語り手が言葉にできない「真実」を語りの空白の中に読むように促される。この幾重にも重なり、隠蔽された物語を、語りの沈黙の中に読むことこそ、『アグネス・グレイ』を真に読むことではないか。

2. 家庭とジェンダー

語り手のアグネスが沈黙しつつ、読者の解読を促している語りえない物語とは何か。アグネスはまず、両親の出自と結婚の経緯から語り始める。裕福な地主の娘であった母親は、教区牧師のリチャード・グレイと恋に落ち、両親の反対を押し切って結婚、一族から絶縁される。リチャードは、牧師禄に加えて僅かに財産も持っていたが、自分のために豊かな暮らしを捨てた妻への精神的な負い目と将来に対する焦りから、投機に失敗して借金を抱える。アグネスがガヴァネスとなった社会的、経済的理由を語るその記述は、同時に彼女が子供時代を過ごした「家庭」の特殊なあり方を示している。

そもそも勘当を覚悟で身分違いの結婚をしたアグネスの両親は、世間と異なる価値観の持ち主といえる。しかし、だからといって、アグネスの父親にヴィクトリア朝の一般的価値観が浸透していないわけではない。たとえば、二人の結婚の決断は、

母が価値あるすぐれた女性だということを父は十分承知していましたので、彼女自身が貴重な富なのだから、自分のつましい炉辺を飾ってもよいと言ってくれるなら、どんな条件でも喜んで彼女を妻にしようと考え、母の方は、愛する男と引き裂かれるくらいなら自分の手で働こうと考えていたのです。(2)

と説明される。妻が本来与えられるはずの持参金に代えて、彼女自身を「貴重な富」とみなし、彼女に「自分のつましい炉辺を飾る」ことを求めるリチャー

ドは、娘の結婚相手に愛情よりは地位と財産を望む舅の父権的価値観を否定するように見えて、じつは妻を自己の家庭を飾る「炉辺の天使」、あるいは金銭と等価の所有物と見る点で、舅と同じ価値観にとらえられている。一方、愛する男のために「自分の手で働こう」と考えるアグネスの母親は、愛する夫への献身という父権的価値を踏襲するように見えて、女性の有閑を「上品さ」の証と見たヴィクトリア朝のブルジョワ的価値観からはみだしてゆく要素を内包している。

こうした両者の資質は、リチャードが投機に失敗し、極端に家計を切り詰める暮らしとなって一層明らかになる。

父の心に苦々しい苦しみをもたらしたのは、あれほど輝くばかりに高い教養を身につけ、皆から敬愛され称賛されていた女性が、活発でやり繰り上手の主婦となり、絶えず家事に手を動かし、家計の節約に頭を使っているのを目の当たりにすることでした。(5)

「敬愛され (courted)」 「称賛され (admired)」 と重ねられる受動態の動詞が示すように、人々から愛され、崇められる受動的な有閑夫人であることを妻に望みながら、彼女が自分の手と頭を使って労働し、金銭のやり繰りに励む「活発でやり繰り上手の主婦」に変身するのを苦々しく眺めるリチャードのこの描写は、アグネスの家庭におけるジェンダーの役割分担の逆転を象徴的に示している。⁽³⁾ いやむしろ、男性的な行動の人となった母親が、あくまでも理想的な「主婦」の領域を踏み越えないことを思えば、本来父親が負うべき役割をも彼女が兼ね備えるようになったというべきか。

アグネスの母親は、「もともと、とても賢くて勤勉だったので、自分の仕事を人に任せる気にはとてもならず、それどころか、自分のためばかりではなく人のためにも喜んで行動し、考えようと思いました」(6) と描かれるように、境遇によって働くことを強いられたのではなく、生まれつき能動的、男性的な特質を持つ人物である。この彼女のジェンダーの役割を越えた男性的な強さが、夫や娘に対する女性的な献身にもかかわらず、夫の健康を奪い、

ついには彼を死に追いやったともいえるだろう。いずれにしても、父親の投機の失敗からその死にいたるグレイ家の描写は、アグネスが家庭教師となる原因を説明する以上に、男女の役割分担が混乱し、真の父親が不在となったその家庭の母権的な有りようを語っているのである。

アグネスは、このグレイ家で、外界との接触をほとんど持たずに少女時代を過ごす。十八歳になっても末っ子の自分を「子供」あるいは「ペット」(2)と見る家族に反発して、彼女はガヴァネスとして世に出ることを決意する。

ガヴァネスになるってとても素敵なことだわ。世の中に出て、新しい人生を踏み出し、自分で行動し、今まで使わなかった能力を使い、未知の力を試し、自分の生活を支え、お父さまやお母さまや姉さんを安楽にし、その助けとなるものを稼ぎ、(略)お父さまに「かわいいアグネス」ができることを示し、お母さまとメアリーに私が二人の思っているような全く無力で考えのない人間ではないと認めてもらう。そのうえ、子供たちの世話と教育を任されるなんてわくわくするわ。(9)

他者に扶養されるばかりで世間を知らず、子供やペットにも似た無力な存在。アグネスが与えられる自己のイメージは、ヴィクトリア朝の一般的女性像に通じている。このジェンダーの枠組みを彼女は本来の自己とは異なるものとして退け、母親と同じく、行動のうえでも経済のうえでも自立して能動的に活動する男性的な能力をも兼ね備えた両性具有的なあり方に自己の本質を見ようとする⁽⁴⁾。アグネスのこの自己イメージは、母権的なグレイ家にあってはじめて生み出されたもので、母親の「才芸」に加えて、父親からラテン語を学んだ彼女の教育も、その両性具有的な自己イメージの形成に貢献している。じっさい、子供の世話と教育を賃金と引きかえに提供するガヴァネスという職業は、アグネスの母親が備える母権的な性格に通じている。したがって、ガヴァネスとして成功し、大人になることは、アグネスにとっては、ジェンダーの枠組みから自由な自己、母親を手本に彼女がグレイ家で育んだ理想的

な自己のイメージを実現することにほかならない。

ガヴァネスとして自己実現への一步を踏み出したアグネスは、彼女が対峙すべき「世間」にグレイ家と同じ母権的な世界を期待する。世間を見たいというアグネスの望みが母親の語る「物語」や「逸話」(2)によってかき立てられることは、彼女にとっての「世間」が、理想的な「自己」としての母親像と重なっていることを示している。アグネスが、まだ見ぬブルームフィールド夫人に「優しい母親らしい女性」(13)を望み、マレイ夫人の態度を母親のそれと対比するのは、そうした彼女の願望を示唆するものだ。

ところが、アグネスの期待にもかかわらず、最初の赴任先となるブルームフィールド家は、たとえば嫡男のトムが勉強部屋や本の所有権を妹に対して断固として主張し(16)、ブルームフィールド氏が家政の領域にまで立ち入って細かく采配を振るう(23)ように、家の隅々まで男性の支配がゆきわたった父権的な世界である。不従順な子供たちを前に、彼女はガヴァネスとして当然与えられるべき「権威」を欠いた自分の無力を痛感し、同時に、「気難しく怒りっぽい父親の気質にいつもびくびくし、父親が苛立つとよく与える罰を怖がること」(24)によって秩序づけられたブルームフィールド家の父権的なあり方を実感する。こうした男性の暴力的な力は、

トム坊ちゃんは、人に支配されるのを拒むだけでは満足せず、自分が支配者にならずにはおさまりませんでした。そして、妹だけではなく家庭教師までもを、自分の手や足を使って思いどおりにする決意を示したのです。(24)

と描かれるように、長男のトムによって一層露骨な形で模倣され、さらにブルームフィールド夫人の弟ロブソン氏によって助長される。ブルームフィールド家は、男たちが徹底して暴力的な支配者として君臨する男性的、父権的な世界であって、同様のことは、家長であるマレイ氏が召使のすべてに絶対的な権力をふるう(59)次の赴任先マレイ家にも見ることができる。

たしかに、ブルームフィールド家やマレイ家におけるアグネスの苦闘は、

ガヴァネスの地位の曖昧さや親の無理解、そして子供たちの倫理観の欠如といった社会的、道德的問題に起因するよう見える。しかし、飲酒や動物いじめといったトムの悪癖を「勇敢で男らしい気性」(43)の表れとして奨励するロブソン氏を、「尊大で男っぽいロブソン様は、女性を軽蔑していました。でもあの人はコルセットを付けたきざな男にすぎません」(42)と非難するアグネスの口調からは、そうした社会的な問題の背後に、彼らが体现する父権に対する反発、あるいは批判が読み取れる。ブルームフィールド家やマレイ家に対するアグネスの批判は、「世間」に浸透する男性的な権力を、暴力的で欺瞞に満ちた贗の権力と見る彼女の視点を、同時に示すことになるのである。

3. アグネスの自己形成

こうした父権的な世界で、アグネスは理想的な自己を実現することができるのだろうか。マレイ家に着任した彼女は、

その家で私だけがつねに道義を主張し、いつも本当のことを言い、ほとんどの場合に自分の欲望を抑えて義務を果たそうとしました(略)。

(62)

と語って、自己のアイデンティティの源を道義や誠実さ、そして義務感などの倫理的な価値に置く。同様の描写は、テキストの至るところで繰り返され、信仰に厚く、道德的で、忍耐強く、理性的なアグネスのイメージがくっきりと形作られてゆくのである。

注意すべきは、そうした彼女の自己像が、主に家庭教師先の生徒との対比によって生み出されることだ。たとえば、ブルームフィールド家の子供たちを特徴づけているのは、「調教されていない荒々しい子馬」(24)に譬えられる野性的な衝動で、それは、イタチやモグラ、そして小鳥の雛を捕らえてはなぶり殺しにするトムの残酷な遊びや、思いどおりにならなければ、唾を吐きかけたり、「大きく甲高い、耳を突き刺すような叫び声」(28)を挙げたり

するメアリ・アンたちの動物的な振る舞いに象徴される。アグネスは彼らの「野蛮な行為」を抑制し、「正義や人間性などの概念」(43)を与えることを自らの任務とするのだが、苦闘も虚しく目的を果たせないまま職を解雇される。

マレイ家においてもまた、長男のジョンは「若い熊のように乱暴で、騒がしく、言うことを聞かず、節操がなく、学ぶ気もなければ、教えようもない」(65)。そして次女のマチルダは、

動物としてなら、マチルダは立派なもので、生命力に溢れ、いきいきとして、活動的です。しかし、知性の点では、野蛮といえるほどに無知で、不従順で、不注意で、筋がとおりません(略)。(64)

と描かれて、理性的な教育や文化的洗練を一切受けつけない荒々しい自然、動物にも似たその衝動性が強調される。アグネスは、子供たちの野蛮な行為を克明に記録し、それを自身と対比しながら鋭く批判することによって、道徳的で理性的な「自己」の輪郭を作り上げてゆくのである。

同様のことは、マレイ家の長女ロザリーの描写にも読み取れる。

十六歳のマレイ嬢は幾分お転婆でしたが、その年頃の娘ならよくある程度で、ひどいというほどではありませんでした。しかし十七歳になると、その性向は他のすべての性質とともにひとつの情念に支配されて、たちまち何もかもを貪欲にわがものとする野心にとらわれてしまったのです。つまり、男性の目をひきつけて幻惑するという野心です。(63)

と描かれるロザリーは、奔放ともいえるセクシュアリティの持ち主である。十八歳で社交界にデビューするや、類まれな美貌でたちまち男たちを虜にし、地位と財産のために貴族のアシュビー卿との結婚を求めながらも、ハンサムな教区牧師のハットフィールドやアグネスが密かに愛する副牧師のウェストンに戯れの恋を仕掛ける。ハットフィールドとの逢い引きの場面で、片手にミルトの小枝をもてあそび(114)、「私の恋人はアドニスでなければ」(126)と言う彼女は、まさに美と愛とを兼ね備えたヴィーナスにも似た官能美が強調される。しかし、その彼女は、「愛ですって。そんな言葉大嫌い。私たち

女にそれを当てはめるなんて、ひどい侮辱だわ。」(116) と言うように、じつは外観の「美」のみで「愛」を知らない偽りのヴィーナスにすぎない。自ら愛することのないロザリーにとっては、美しい容貌に男の目を引きつけ、彼らを幻惑することこそが情念の唯一の捌け口であって、彼女のセクシュアリティはその美しい表層を「見られる」ことと同義なのだ。

アグネスは、ロザリーの浮薄な恋愛を、自分のウェストンへの思いと対比して批判するが、ロザリーのこの表層へのこだわりこそ、彼女をブルームフィールド家の長女メアリ・アンに結びつけるものである。

ロブソン様は絶えずあの子のうわべを飾ろうとする傾向を助長しようとしていました。(私はそれを全力で打ち壊そうとしていたのに、です。) 彼女の可愛い顔のことを話題にし、彼女の頭を自分の容貌に関するありとあらゆるうぬぼれでいっぱいにしたのです。(私はそんなものは精神や物腰を磨くことに比べれば塵のようなものだと思なすように教えてきました。) しかも、あの子ほどおせじに弱い子供を私は見たことがありません。(42)

メアリ・アンの「うわべを飾ろうとする傾向」や「自分の容貌に関するありとあらゆるうぬぼれ」は、ロザリーの「見せびらかすことへの愛着」(62)に通じており、いわばロザリーは成長したメアリ・アンともいえるだろう。アグネスはセクシュアリティの発露としての彼女たちの表層性に、「精神や物腰を磨くこと」といった道徳的、精神的価値を再び対置する。そしてそのことによって、ウェストンへの恋愛をも含めた自己のアイデンティティが、倫理や精神性にあることを主張するのである。

このように、ブルームフィールド家とマレイ家の描写は、成り上がりのブルジョワと代々の地主、あるいは六、七歳の幼い子供たちとアグネスとほぼ同年代の娘たちといった社会階層や年齢の差異を無視するかのようになり、両者の等質性が強調され、それとの対比によって、アグネスの倫理性や精神性がくっきりと描きだされてゆく。しかし、自分と生徒との相違をことごとに強

調するアグネスの言説は、かえって両者の間のつながりを、読者に印象づけはしないか。たとえば、動物のように癩癩を起こすだけで人間的な感情も倫理も受けつけないブルームフィールド家の子供たちを、自分とは異質な存在としてアグネスが批判するのを、母親が「あなたには気性のうえていくぶん欠点がありました」(51)と諫めるのは、両者の間にひそむ共通性を示唆するだろう。

トムが小鳥の雛をなぶり殺しにするのを防ごうとしてアグネスがそれらを一気に石で押しつぶす衝撃的なエピソードや、ブルームフィールド氏から不当な叱責を受けた彼女が、

火掻き棒を握ると、私はそれを何度も石炭の燃え殻の中に突っ込み、常ならぬ勢いで燃え殻をかき立てました。こうして、消えそうな火をおこすという口実のもとに、私はいらいらした気持ちを鎮めたのです。(40)

と、その腹いせに暖炉の火を激しくかき立てる場面は、信仰厚く、道徳を説き、自己の衝動を抑えた理性的な判断を誇る彼女の意識下に、乱暴な子供たちにも通じる、火のように激しい、破壊的、暴力的な情念がひそんでいることを露呈する。

同様に、ロザリーが示す表層へのこだわりや性的欲望もまた、アグネスの中に見ることができる。たとえば男たちの視線を一身に浴びるロザリーとは対照的に、アグネスは、

私はハットフィールドさんにとっても、またこのあたりに住むほかのどの紳士にとっても、目に見えない存在でなければならなかったのです。(101)

あるいは、

あの方たちの目が、話の途中でたまたま私にぶつかることがあっても、まるで虚空を見ているかのよう——まるで私の姿が見えないか、あるいは必死でそう見せかけようとしているように見えました。(106)

と、自分が若い男女の社交の場で他者の目を決して引きつけることのない

「目に見えない存在」であると言う。ロザリーにとって「見られること」がセクシュアリティの表象であれば、他者から「見られる」ことのないアグネスの「虚空 (vacancy)」ともいうべき身体性の欠如は、肉体を離れた彼女の精神性や倫理性を保証するように思われる。

しかし、ロザリーとの相違を際立てるはずのその描写に、徹底して自分を無視する人々、とりわけロザリーの求愛者たちへのアグネスの不満や憤りがひそんでいることを思えば、そこに、アグネス自身が説明するガヴァネスの社会的地位の曖昧さだけではなく、男性から見られたいというロザリーのそれにも通じる欲望、おそらくは彼女自身もはっきりと意識できない密かな願望を読み取ることもできるだろう。じっさい、ウェストンにひかれ始めたアグネスは、「どうしてあれほどの美がそれを悪用する者たちに与えられ、自分にも他者にもそれを益とするであろう者に拒まれているのでしょうか。」(125)と自分の不器量な容貌を嘆き、鏡に映った自分の顔をロザリーの美貌と比べながら、

額には知性が、そして濃い灰色の目には人格や感情が表れているようだけれど、それが何になるというの…低いギリシア風の額や情味を欠いた大きな黒い目のほうがずっと好まれるのだわ。(138)

と語って、「豊かな教養を身につけ、善良な心を持っていさえすれば、誰も外観のことなど気にしない。」(138)と外観に対する精神の優位を説く彼女の信条とはうらはらに、ロザリーと同じ「表層」へのこだわりを見せることになる。⁽⁵⁾

しかも、ロザリーがウェストンに言い寄りをはじめたと知ったアグネスが激しく動揺する、

私はまず衝動的にベッドの横の椅子に身を沈め、それから頭を枕にもたせかけて激情のままに涙をどっと流して気を楽にしようと思いました。思うさまそうせずにはいられなかったのです。でもなんということでしょう。それでも私は自分の感情を抑え、それを呑み込まなければならなかつ

たのです。鐘の音が、勉強部屋での夕食を告げるおぞましい鐘の音がしたのです。私は穏やかな顔で階下に降り、微笑み、声をたてて笑い、冗談を言い、そうです、食べることさえしなければなりません。そんなことなどできるでしょうか。(132-33)

という描写は、理知的で自己を抑え穏やかな彼女の心の奥底に、食欲に代わるいまひとつの欲望、つまり、ロザリーと同じセクシュアルな衝動が激しく渦巻いていることを明らかにする。⁽⁶⁾

このように、アグネスとの類似と対比によって描かれる生徒たちは、彼女の「自己」の一部が投影された一種の分身であって、ブルームフィールド家の子供たちは、当初アグネスが周囲から押しつけられ、自分自身も意識していたような世間に乗り出したばかりの子供としての、そして、マレイ家の娘たちは、アグネスの実際の年齢が示すような父権社会における大人の女性としての彼女を表しているといえよう。トムやジョンに通じる動物的衝動の持ち主であるマチルダは、父親のお気に入り、父親や馬丁たちの乱暴な男言葉を真似、乗馬や狩りを好む男性的な人物とされる。⁽⁷⁾一方、その美貌で男たちを誘惑するメアリ・アンやロザリーは、もっぱらその女性的な側面が強調される。とすれば、アグネスの生徒たちが表すそれら二つの特質は、アグネスの理想的な自我である母親が具現する男性性と女性性を表象していることになる。アグネスは本来自己の内にひそみ、母を模倣するために実現しなければならない二つの要素を、家庭教師先の子供たちに投影し、父権社会においてそれらが持つ意味を探る。しかし、男性が暴力的な権力をふるうその世界では、それらの要素は母権的なグレイ家にはない奇妙なねじれを表すことになるのである。

つまり、母親においてはもっぱら能動的な活動の力として肯定的な価値を与えられた男性性は、そこでは野蛮で乱暴な暴力として負の価値しか与えられず、たとえば、マチルダの近況とその成長ぶりが語られる彼女に関する最後の描写、

マチルダは今でも勝手気ままで無謀だけれど、上流のガヴァネスを得て、立ち居ふるまいだけはかなり改められ、近々社交界にデビューすることになっていました(略)。(178)

が示すように、とりわけ女性においては、いかにも不都合なものとして成長の過程で抑圧され、矯正されずにはいない。

同様に、ロザリーが体現する女性性もまた、独身時代の彼女がその美貌を武器にあらゆる男性を虜にして思いのままに力をふるったことから、一見男性を支配する力を持つように見えるが、じつは、下劣で横暴な夫アシュビー卿との結婚生活を彼女が、

「あの人は私を崇めているから好きなようにさせてくれると思っていたの(略)。でも、あの人こそ好きなようにして、私は囚人であり奴隷でなければならないのだわ。」(184)

と嘆くことから明らかなように、結局は父権の確立に寄与するだけで、真の権力を女性にもたらすことはない。

アグネスの母親が母権的な力を得られたのは、彼女の女性性が母性という形で発揮されたからだ。そのことは、夫にその名で呼ばれるただ一度の機会を除いて、彼女がつねにアグネスによって「私の母」とだけ描かれて、母親としての側面が強調されていることから明らかなである。ところが、アシュビー卿との不幸な夫婦生活における心の慰めを、幼い娘の養育に心を注ぐことで得るようにとアグネスが勧めるのに対して、

「どんな喜びがあるというの。娘が大きくなって私の輝きを奪い、私が二度と味わえない楽しみを謳歌するのを目にするのよ。」(185)

と言って、赤ん坊の娘に自分のライバルしか見ることのできないロザリーには、アグネスの母親が身に備える母性が徹底して欠けている。そのことは、父権社会における女性性が、母性を欠いた性的欲望としてだけ発揮されるもので、そのために女性同士の連帯を妨げていることをも明らかにするだろう。

アグネスは、理想的なアイデンティティを構成すべき自己の一部を家庭教

師先の子供たちに次々と投影し、父権社会におけるその意味と限界を探る。その過程で、母親においては見事なバランスをとって具現された男性性や女性性が、父権社会においてはさまざまな抑圧を受けて動物的な衝動や性的欲望へと歪められ、結局は母権的な自己の確立を妨げることを知るのである。その結果、彼女は自己の本質をなすそうした要素を無意識のうちに抑圧し、それらを自分とは異質のものとして切り離すことで、自己の形成を果たす。信仰、道徳、理性、愛情といったヒューマニスティックな価値に基づいて形成されるアグネスの自己は、一見ジェンダーの枠組みから自由なあらゆる人間に共通する普遍的価値を表し、彼女が目指していた理想の自己像を達成したように見える。しかし、自己に本来備わっているはずの男性性や女性性を抑圧し、ジェンダーだけではなくあらゆる性の可能性を否定することで実現されるそのアグネスの「自己」は、両性具有的な母親の豊穡さからはほど遠い大きな欠落を抱えているといえるだろう。

いやそれどころか、彼女が最終的に形成するそのヒューマニスティックな自己像が、じつは当時のブルジョワの父権的価値と一致することを思えば、アグネスの自己形成は、当初彼女が鋭く反発した父権社会の価値をジェンダーを越えた「人間的な」価値へとすりかえることで達成されたといえるかもしれない。アグネスと同じように、敬虔で分別があり、慈愛の精神に満ちた高潔な牧師ウェストンとの結婚は、母権的な自己の確立を目指した彼女が結婚という幸福のアウラの中で、我知らず父権社会に呑み込まれてゆく過程を象徴するのである。

4. 言葉からイメージへ——女性としての語り

もっとも、主人公のアグネスが父権社会の価値に我知らず取り込まれてゆくのに対して、語り手のアグネスは、そうした抑圧の構造を鋭く認識しているように思われる。先に見た『アグネス・グレイ』の語りの構造、つまり、すべてを包み隠さず語ると言いながら、さまざまな言いよどみや空白を抱え

たその語りの構造は、自己の本性を抑圧し、自分自身から切り離すことで辛うじて形成されるアグネスのヒューマニスティックな自己にひそむ欠落を表している。しかも語り手は、そうした空白の背後にひそむ抑圧されたアグネスの本質をも、ブルームフィールド家やマレイ家の子供たちに託して象徴的に語る。

そもそもアグネスが沈黙の人となったのは、周囲の無理解や彼女の内気な性格にだけ原因があるのではない。ブルームフィールド家に赴任したアグネスが、長男トムとはじめて引き合わされる場面で、

「しかし、彼女の兄が求めたのは、私がすべての注意を彼ひとりに向けることでした。私と暖炉の火の間にすっくと立ち、両手を後ろにまわして、雄弁家のように滔々としゃべり、妹たちがうるさすぎると思うと、ときどき話を中断して厳しい叱責を彼女たちに浴びせました。(16)

と、彼が嫡男としての男性的な権力（彼が家庭あるいはその守護神としての女性を象徴する暖炉を背負う形でアグネスの前に屹立するのは、父権の体現者としての彼のあり方を表すだろう）を「雄弁家」として自ら語り、女たちの口を閉ざすことによって示そうとするのは、言葉がいわば父権の象徴として男性にのみ許されたコミュニケーションの手段であることを明らかにする。

「じっさい、母親のブルームフィールド夫人がトムの長所を「いつも本当のことを話すこと」(15)とし、ブルームフィールド家に赴任したアグネスが、門を入ってきた見知らぬ紳士を彼が子供たちに命令する「いらいらして甲高い調子」(22)から主人のブルームフィールド氏と知り、教会に行くとき以外ほとんど会うことのないマレイ氏の所在が、遠くから響いてくる「大きな笑い声」や召使を「罵る冒瀆的な言葉」(59)によって確認されるように、男たちにとって彼らの語る言葉はそのアイデンティティの表象としてある。牧師であるハットフィールドやウェストンが、朗読や説教、そして祈りといった言葉の世界を自己のアイデンティティの基盤とするのは、そのことを典型的に示している。

なかでも、アグネスが心引かれる理想の男性ウェストンは、副牧師として赴任してきた彼にはじめて出会ったアグネスが「あの方について特に気がついていたのはただひとつ、朗読の仕方でした」(79) と言うように、何よりもまず「語る人」であって、言葉との深いかわり合いが強調される。

日課を読む時には、文章のひとつひとつが十分趣きを持つように心を注いでいるようでした。あのように読めば、どんなに不注意な人でも耳を傾けずにはいられないし、どんなに無知な人でも分からないということはないでしょう。また祈りの言葉を読む時には、読んでいるというより心の底から熱心に本気で祈っているようでした。(79)

と描かれる彼の言葉は、語る言葉のはしばしまで意味を充満させ、あらゆる人に心の真実を理解させずにはいない意味に満ちた「声」としての機能にその特質がある⁽⁸⁾。牧師として究極のロゴズである神の言葉を代弁する彼は、彼が語る理想的な言葉によって、言葉と男性性との深いつながりをも明らかにするのである⁽⁹⁾。

アグネスは礼拝やナンシー・ブラウンをはじめとする下層の人々との交流を通して、直接間接にウェストンの言葉に触れ、それによって彼への思いを深めてゆく。興味深いのは、そのウェストンの言葉がさらにアグネスの理想的なモデルである母親の言葉にも通じていることだ。父親の死後マレイ家を去って母親と寄宿学校を始めたアグネスが、散歩の途中で再会したウェストンの訪問を受け、彼と母親の会話に耳を傾ける場面は以下のように描かれる。

母が自由自在に力強く流れるように言葉を発し、語る言葉のすべてに確かな分別が示されているのを耳にして、私はもう少しで母を羨ましいと思うところでしたが——じっさいはそうした嫉妬の気持ちを持つことはありませんでした。たしかに、あの方のことを思うと私にそうした才能がないのは申し訳ない気もしましたが、私がこの世の誰よりも愛し尊敬する二人があれほど親しげに、賢く、見事な会話を交わしているのを座って眺めることは、私にとって大きな喜びだったからです。(194-5)

「自由自在に力強く流れるように言葉を発し、語る言葉のすべてに確かな分別/意味 (sense) が示されている」アグネスの母の言葉は、意味するものと意味されるものの関係において、ウェストンが語る「明確で力強い」(80) 意味に満ちた言葉とぴったりと重なり合う。「もう少しで母を羨ましいと思うところでした」とアグネスが言うように、ウェストンや母親が展開する言葉の世界は、アグネスが求めながらも決して実現できないもの、つまり、男性性の象徴であって、アグネスの母親がここでウェストンに匹敵する言葉の使い手とされるのは、彼女が身に負う男性的な側面を象徴する。

とはいえ、この物語に雄弁に語る女性がいけないわけではない。たとえばブルームフィールド老夫人は「活発なおしゃべり」(37) を特徴とし、ロザリーもまたウェストンの気を引こうとして、「やすやすと立て板に水のように言葉を繰り出す」(131)。しかし、ブルームフィールド老夫人のそのおしゃべりが、

彼女が私のところにやって来て話すときにはしばしば内緒話といった調子で、頷いたり、頭を横に振ったり、手や目を動かして合図をしたり、いかにもある階級の老夫人にありがちな話し方でした。(略) 時には(略) 文章の途中で言葉を切り、頷いたり訳知り顔でウィンクを差し挟んだりすることで、彼らの母親が無分別な行いで私の力を制限し、彼女の權威によって私を助けるべきなのにそうしていないと感じていると示したものでした。(36)

と描かれるように、彼女は言葉を駆使して多くの意味を伝えるように見えて、じつは、「頷いたり」「頭を横に振ったり」「手や目を動かして合図をしたり」「ウィンクを差し挟んだり」と、言葉ではない無言の動作によって語るにすぎない。ロザリーもまた、美しい「姿」や「輝くばかりの微笑み」をウェストンに見せることで「軽薄でつまらない」(131) 会話に十全な意味を与えようとする。つまり、ブルームフィールド老夫人もロザリーも、女性の「話し手」たちは、一見雄弁に語るように見えて、言葉ではなく、動作や容貌など

の身体的な表現で意味の空白を埋める、言葉によらない「話し手」なのである。

じっさい、ブルームフィールド夫人が「どんな話題でも多くを語るのは彼女の流儀ではなかった」(45)とその言葉足らずの話し方を強調され、メアリ・アンやファニーが「金切り声」や「吠え声」などの無意味な音を発するだけで、アグネスが教える単語、つまり意味のある言葉を口にすることを頑強に拒み、マチルダが父親や馬丁たちの乱暴な男言葉を真似て、アグネスのみならず両親やロザリーまでもを嘆かせるなど、言葉との不調和はこの物語において女性に特有の問題であって、そのこともまた言葉とジェンダーとの深い連関を読者に印象づける。

すでに述べたように、アグネスの母親の語る言葉が、彼女が身に負う男性性の象徴であるなら、それは彼女が君臨する両性具有的な母権社会においてのみ可能なコミュニケーションの手段であろう⁽¹⁰⁾。しかし、父権社会の中で女性として生きるアグネスには、それはいかに望んでも手に入れることのできないもので、彼女はウェストンや母親が用いる男性的な言葉によっては言い表せない自己のあることを鋭く意識している。あえて父権社会の中で女性が言葉を用いようとすれば、ブルームフィールド老夫人やロザリーのように、意味の空白を残し、虚偽をはらんだいかにも表層的なものとならざるをえない。こうして、アグネスは沈黙の人として語ることを放棄し、むしろひたすら「聞く人」となることで自己の実現を果たそうとするのである。

しかし、言葉よりは沈黙を選び取るとしても、アグネスが自己表現の可能性を全く放棄してしまったわけではない。すでに見たように、彼女は、そうした父権的な言葉を前に沈黙するだけでなく、言葉では語り尽くせない自己の本質を、家庭教師先の子供たちの言動に自己の内面を重ねることで、無言のうちに象徴的に語る。そのことは、アグネスによる言葉の放棄が、同時に新しい女性特有の意思伝達の可能性を開いていることをも明らかにするだろう。

母親とウェストンの会話を聞きながらアグネスが「語る人」としての自己の「欠落 (deficiency)」(194) を鋭く意識する場面は、そうした新たなコミュニケーションへの手掛かりを指し示している。母親とウェストンが共有する言葉という意志疎通の手段が自分には閉ざされていることを知りつつ、アグネスが何の疎外感も感じなかったのは、二人が会話の合間に、

やさしい言葉やそれ以上にやさしいまなざし、そして繊細な心づかい——細やかで微妙なので言葉では捉えられず、したがって言い表すこともできないけれど、心の深みで感じ取ることのできる心づかいを際限なく与えてくれた (略) からです。(195)

と彼女は言う。ウェストンや母親が示すこの言葉を超えた言葉は、ブルームフィールド老夫人やロザリーが用いた身振りや容貌などの身体的言語にも通じている。「私はおおっぴらに言われたこと以外、どんなことも分かつとは (略) しませんでした」(36) というように、かつてはアグネスが語られた言葉それ自体に頑なに執着したために理解できなかったこれらの視覚的な言語は、ここでは言葉の世界をアグネスが自分の本質とは相いれないものとしてはっきり自分自身から切り離れたために、かえって伝えるべき意味を間違いなく表す的確な表現手段として受け入れられている。この言葉によらない視覚的なコミュニケーションこそ、沈黙の人アグネスにふさわしいもので、それはまた、ロゴスとしての男性の言葉とは異なる女性としての表現手段でもある。

アグネスがウェストンと再会する朝の海辺の風景が典型的に示すように、『アグネス・グレイ』が、天候や地形などの視覚的なイメージで主人公の心境や運命を暗示する象徴的な語りに満ちていることは、すでに多くの批評家が指摘している。⁽¹¹⁾

そして、この澄みきった大気の瑞々さといったら言葉にならないほど。太陽の熱はちょうどそよ風の有り難さを十分に感じさせるくらい、その風もちょうど海全体に動きを与える程度で、波がはずむように海岸に打

ち寄せ、泡立ちきらきらと輝いてまるで喜びで有頂天になったようでした。ほかに動いているものはなく——私以外に生き物の姿は見えません。私の足跡は、そのしっかりとして乱れない砂浜に刻まれた最初の足跡でした——私以外にその砂を踏んだ者はなく、昨夜の潮の流れが昨日の間に刻まれたもっとも深い印をも消し去っていたのです（略）。(188)

早朝の風景にふさわしくあらゆるものが刷新されたような瑞々しさと、躍動的な運動の感覚は、それまでアグネスを取り巻いてきた黒雲に覆われ息苦しく停滞した風景とは対照的だ。前日に刻まれたものすべてが潮流によって消し去られ、何も書き込まれていない「しっかりとして乱れない」砂に新たな足跡を刻む彼女の姿は、潮の流れが「時間」を象徴することを思えば、彼女の人生に新たな、しかも堅固で活気に満ちた豊かな局面が開かれることを暗示するだろう。

「海は私に喜びをもたらしました」と語り、「激しい潮風が荒々しく吹き荒れ、夏の朝のまぶしいほど瑞々しい光に満たされた」(187) 海岸を散歩することを愛してきたアグネスにとって、海を波立たせて激しく吹き荒れる潮風は、アグネスの本質を、心の奥底にひそむ衝動的なエネルギーを象徴する。「迷路のような通りや家々」(187) を抜けて海岸にたどり着き、そうした風景を眺めるアグネスは、心の奥底に畳み込まれた自己の本質に対峙しているのであって、風や波の荒々しい動乱の様は、かつて彼女が怒りにまかせてかき立てた「火」のイメージにも通じている。もっとも、表現の術を持たずに鬱屈したアグネスの心情そのままに停滞し、時に発作的に燃え上がったその心の「火」は、ここでは「ちょうどそよ風の有り難さを十分に感じさせるくらい」の心地よい暖かさに姿を変え、「荒々しく吹き荒れる」風の激しさも「ちょうど海全体に動きを与える程度」に抑制されている。水、風、火、土と自然の四大が見事なバランスを保ちながら澁みなく躍動するこの風景は、「ほかに動いているものはなく——私以外に生き物の姿は見えません」というアグネスの言葉が示すように、均衡のとれた躍動的なアグネスの「個」の

有りようを象徴し、⁽¹²⁾ 自己の感情や衝動を滞りなく表現する術を得ることで彼女の語り手としての自己が確立されたことを暗示する。

アグネスはその手記の最後に、

「ここで筆を置きましょう。私がこの物語をそこから編み上げた日記は残りわずかとなりました。あと何年分かは語りつづけることができるのですが、次のことだけを付け加えて終わりたいと思います。私はあの輝かしい夏の夕暮れを決して忘れませんし、あの切り立って突兀とした丘と、絶壁の淵をいつも覚えているでしょう。そこから、私たちはすばらしい日没が足元の絶えず波立つ水の世界に映し出されるのを眺め——心は神への感謝と幸福と愛でいっぱい——ほとんど言葉にできないほどでした。(197-8)」

と語る。日記に書き綴られた言葉に代えて、ウェストンからの求愛の場面の風景を、つまりその視覚的なイメージを、「ほとんど言葉にできない」感謝や幸福や愛などの表現として提示するこの一節は、言葉からイメージへという語り手アグネスの女性としてのコミュニケーションの完成を象徴的に示している。言葉で記述するのではなく、イメージで暗示するこの視覚的、絵画的な語りこそ、アグネスの語りの特質をなすもので、それは沈黙の人アグネスにふさわしい語りの方*法*といえるだろう。アグネスが姉と並んで絵画の才能を指摘されていたことは、その絵画的な語りを準備するものでもあったのだ。

こうしたイメージによる語りは、男性の言葉に対する女性の言葉ともいえるもので、主人公アグネスが達成できなかった両性具有的な自己は、こうして男性的な言葉を最小限に切り詰めながら、視覚的なイメージで象徴的に語る彼女の語りにおいて実現する。ウェストンとの幸福な結婚生活を、アグネスは「人間としての欠点はどうあろうと（じっさい欠点がひとつもない人などいるのでしょうか）、あの人を牧師として、夫として、そして父親として非難する人がいれば誰にでも私は挑みかかるでしょう。」(198)と描く。ウェ

ストーンへの深い尊敬と愛情を語りながら、牧師、夫、父親という彼の社会的役割と、「人間/男性 (man)」である彼の「個」のあり方に微妙な区別を設けるアグネスは、神の完璧を意識した深い信仰心を表すだけではなく、男性であるウェストンとは異なる女性としての視点を彼女が自己の内にしっかりと確立していることをも強く感じさせる。母権的な母親とは異なり、あくまでも父権社会の中で抑圧される女性としての自己を意識しながら、それを冷静に見据え相対化するアグネスの視点。語りの中に含まれたさまざまな言いよどみや空白にもかかわらず、アグネスがその手記を「私はもはや十分に語ったと思います。」(198)と語り尽くした充足感を示して閉じる時、アグネスが目指した両性具有的な自己が彼女の語りにおいて実現されたことを、読者は実感するのである。

注

*小論は日本ブロンテ協会2000年大会(2000年10月14日、於同志社大学)におけるシンポジウム「『アグネス・グレイ』を読む」(司会/発題 玉井暁 他の発題者 嶋公代)においてパネラーの一人として発表した原稿に補正、加筆したものである。

- (1) Anne Brontë, *Agnes Grey* (Oxford: Oxford UP, 1991), 1. 以下『アグネス・グレイ』からの引用はすべてこの版により、引用文の後に頁数を示す。
- (2) 『アグネス・グレイ』における「沈黙」の効果と、そうした沈黙が生み出す語りの二重性に関しては、Janet H. Freeman, "Telling over Agnes Grey," *Cahiers Victoriens et Edouardiens*, N° 34 (1991), 109-26, Maria H. Frawley, "An Alien among Strangers: The Governess as Narrator in *Agnes Grey*", *Anne Brontë* (New York: Twayne Publishers, 1996), 82-116, 太田美和「一人称の語りに表れる殉教者/ヒロインであるアグネス」『ブロンテ姉妹の時空——三大作品の再評価』中岡洋・内田能嗣編(北星堂, 1997年), 259-271, 前田淑江「『アグネス・グレイ』——沈黙の技法」『アン・ブロンテ論』中岡洋・内田能嗣編(開文社出版, 1999年) 47-64などがすでに論じている。しかし、たとえば周囲の誰からも「見られる」ことのないガヴァネスの社会的アイデンティティの欠如を「声」の喪失として示すアグネスの語りから、ヒロインの自己確立に至る女性としての「心理的成長」を読み取るフローリーや、寡黙なアグネスの語りに「親孝行の殉教者」と「ロマンスのヒロイン」としての相対立する二つの自己像を見る太田氏など、従来の批評では、ヒロイ

- ンの精神成長や恋愛感情といった心理的側面や、語り手の意識的操作を論じるものがほとんどだが、語りの空白にひそんでいるのははたしてそれだけだろうか。
- (3) プリシラ H. コステロも「グレイ夫人のほうがこの夫婦関係で力を持つことになったのは、彼女に苦しい現実に向かい合う能力と金銭や家政の運用能力があったからだ。」と、アグネスの家庭における女性の優位を指摘する。Priscilla H. Costello, "A New Reading of Anne Brontë's *Agnes Grey*", *Brontë Society Transactions*, 19. 3 (1987), 113-18, rept. in Eleanor McNees ed., *The Brontë Sisters: Critical Assessments*, Vol. II (Mountfield: Helm Information, 1996), 11.
- (4) フローリーも、アグネスがガヴァネスとなった社会的、金銭的理由の背後に、女性の自立を阻む「家庭」の問題を読み取るが、議論の中心はアグネスの家庭に浸透したヴィクトリア朝的イデオロギーにあり、その母権的性質には触れていない (Maria H. Frawley, 86-91)。また、エリザベス・ラングランドは『アグネス・グレイ』をヒロインが「男性の成長過程」を踏襲する「女性の成長物語」と定義し、フェミニズム的な観点からヒロインの「自立」に至る精神的成長の過程を論じているが、「女性の教育や自立というラディカルなテーマを完全に穏当な主題に変形した」ところに作者の手腕を見るラングランドの議論は、ヒロインの意識的な自己形成に集中し、セクシュアリティや破壊的衝動といった無意識の世界には踏み込まない。Cf. Elizabeth Langland, "Agnes Grey: 'All True Histories Contain Instruction,'" in *Anne Brontë: The Other One* (Macmillan, 1989), 96-117. rept. in Janet Witalec ed., *Nineteenth-Century Literature Criticism* (Farmington Hills: Gale Research, 1999), Vol. 71, 131-39.
- (5) 杉村藍氏は、語り手の提示する「モラリスト」としてのアグネス像を、自分の容貌に自信のない彼女が自己を正当化するために生み出した創造物と見て、彼女の自己形成とコンプレックスとの連関を論じているが、アグネスの心にあるのはそうしたコンプレックスだけにおさまるまい。Cf. 杉村藍「モラリスト、アグネス・グレイ」『アン・ブロンテ論』, 83-99。
- (6) 鮎沢乗光氏も、ロザリーやマチルダに対するアグネスの批判の背後に、ウェストンをめぐるアグネスとロザリーの「陰湿な罅迫り合い」を読みとり、ヒロインの「愛の衝動とその解放」をこの小説のテーマとする。鮎沢乗光, 「アン・ブロンテ『アグネス・グレイ』のリアリズムと象徴性」『英語青年』143巻9号 (1997年12月), 23-25。
- (7) じっさい、マチルダが散歩の途中に飼い犬が子兎を追いまわして殺す場面に遭遇し、その狩りの一部始終を喜々として報告するエピソード (155) は、トムが小鳥の巣探しで手に入れた雛を残酷なやり方で殺して楽しもうとする場面と重なり、両者の連関を読者に印象づける。

- (8) 「お世辞や甘い戯言を語るのは僕のやり方ではない」と言い、他の人たちが甘い言葉や熱心な申し立てを重ねても語れないことを、自分は「一言で」語るというウェストンの言葉 (197) から、フリーマンは、ウェストンをアグネスと同じ寡黙の人と見るが (Janet H. Freeman, 117-8), むしろここで強調されるのは、数少ない言葉に意味を充満させ、自らの思いを過不足なく語ることのできるウェストンの「語り手」としての充足感の方ではないか。
- (9) もちろん、たとえばウェストンと同じ牧師のハットフィールドが、その説教を「あまり啓発的でない長口上」(81)と描かれるように、男性の中にも無意味な言葉を語る者もあるが、それはウェストンのあるべき男性としての言葉を際立てるためのもので、ハットフィールドの語る空虚な言葉がそのまま彼の人格の空虚さを表している点では、言葉はここでもアイデンティティの表れといえるだろう。
- (10) アグネスの母親が夫の死によって自らの家庭を失い、さらに結婚した娘たちとの同居を拒んで、「家庭」から離れた自立の生活続けることは、彼女が父権的な世界とは相いれない存在であることを明らかにする。
- (11) たとえば、エリザベス・ホリス・ベリーは『アグネス・グレイ』における風景や天候などの空間描写にヒロインの精神的成長の過程が暗示されているとして、その象徴的意味を詳細に論じている。Cf. Elizabeth Hollis Berry, "Agnes Grey: 'Pillars of Witness' in 'The Vale of Life'" in *Anne Brontë's Radical Vision: Structures of Consciousness*, English Literary Studies Monograph Series No.62 (Victoria: University of Victoria, 1994), 39-70.
- (12) ベリーもこの場面におけるアグネスの「孤独」に注目し、「力」と「創造」のイメージに満ちたその風景描写に、彼女の「個」としての「心理的再生」を読み取っている (Elizabeth Hollis Berry, 67)。同様の解釈に、Maria H. Frawley, 113 や、太田美和「『アグネス・グレイ』の朝の砂浜の場面」『英語青年』145巻4号 (1999年7月), 201-3 などがある。
- (13) フリーマンは、世間に浸透する偽りの言葉を前に沈黙を選び取ったアグネスが、風景や身振りによって、特定の読者にだけ理解できる「言葉のない世界」を作り上げようとする過程を論じ (Janet H. Freeman, 122-5), インガ＝ステイーナ・ユーバンクも、アン・ブロンテの小説技法の特質が「控えめな表現」にあるとして、「嘘のない物語」の構築を目指す彼女の抑制された語りとそこにひそむ象徴性を取り上げる (Inga-Stina Ewbank, "Anne Brontë: The Woman Writer as Moralist," in *Their Proper Sphere: A Study of the Brontë Sisters as Early-Victorian Female Novelists* (Harvard UP, 1966), 49-85. rept. in *Nineteenth-Century Literature Criticism*, Vol.71, 84-92)。同様に、太田氏もアグネスの語りの特徴を、言葉ではなくエピファニーにも似た「絵画的な一瞬のイメージ」によって語る抑制のきいた語りに見出している

（太田美和「一人称の語りに表れる殉教者/ ヒロインであるアグネス」, 270）。
しかし、いずれも、こうしたアグネスの語りをジェンダーの視点から捉えては
いないし、議論はアグネスの語りの特質に集中して、プロットや登場人物など
の文脈との連関をも含んだ包括的な観点から作品構造を明らかにしようとするもの
ではないように思われる。